

熊本県山鹿市八千代座の演目種別から見えてくるもの ——明治・大正・昭和戦前期の地域劇場に響いた音楽ジャンル——

塚原 康子

はじめに

熊本県山鹿市にある八千代座¹は、地元の出鹿実業会の人々が劇場組合を結成して明治43年（1910）に竣工した歌舞伎式劇場で、大正・昭和期にわたる歴史の変遷を経て復興し、昭和63年（1988）に国の重要文化財に指定された。往時の劇場の常として、花道・廻り舞台・柵席・棧敷席のしつらえがあり、建築当初の席数は1274人であった。八千代座は明治44年（1911）の開場当初から、芝居や音曲等の興行のみならず、各種の集会・演説会・発表会や、繭置場・展示販売などの地場産業用スペースとしても使われた文字通りの地域の「多目的空間」であり、芝居小屋のみならず、大道具・小道具や、劇場経営にかかわる文書資料、興行時の奉納額の一部までが揃って現存していることも大きな特色である。

文書資料の多くは、八千代座を設計し、初代総支配人を務めた木村亀太郎（1859～1940）の残したもので、その中には、八千代座が開場した明治44年（1911）から昭和13年（1938）に至る各年度（5月1日～翌年4月30日）の「収支計算書」が含まれる²。これは、毎年5月に開催された劇場組合総会のために作成された印刷物で、各年度の「収入之部」に、席料の総収入高とその内訳（収入高、日数、座名と興行主・主催者名）が記載され、興行や貸小屋の概要が把握できる。八千代座のように興行以外の用途も含めた一劇場の数十年間にわたる使用実態が追跡できる資料の残存例は限られており、非常に貴重である。

本稿では、「収支計算書」のうち、八千代座が開場した明治44年度（1911-12）から内訳の記載された昭和9年度（1934-35）までの計24年分を対象に、この間、八千代座で行われた各種演目や用途の種別を分類した上で、3期に区分してその特徴を明らかにし、さらにそれを八千代座と同じ明治44年に開場した東京の帝国劇場や、明治23年（1890）に日本初の音楽専用ホールとして建設された東京音楽学校奏楽堂の用途・演目と対比しながら、1910～30年代の八千代座で聞こえていた音楽ジャンルについて考察する。

1. 八千代座の演目種別（明治44～昭和9年度）の分類

まず、初年度（1911-12）から昭和9年度（1934-35）までの八千代座における演目の内容

と日数、収入（表には席料収入のみを記載し、座布団・下足料は省いた）を年度ごとに表1～24にまとめ、その種別を、■●◆▲（以上、興行系）、□○（以上、集会系）、△（その他用途）、②（内容不明）に分類して、以下の記号によって示す。同一の団体・興行主による日延分は日数・収入ともに合算して記載し、同一団体の興行でも興行主が異なるものは別立とした。

なお、音楽ジャンルに着目する本稿では、節劇（浪花節を用いた芝居）と琵琶劇（琵琶楽を用いた芝居）は浪花節・琵琶との関連を重視し、下記の通り付加記号をつけて区別した。同様に、活動写真と通常の芝居を組み合わせた連鎖劇は、■*で示した。

■：演劇興行（歌舞伎、人形芝居、壮士芝居・新派劇、少女劇、二〇加、歌劇、
節劇■#、琵琶劇■+、両面劇、連鎖劇■*）

●：音曲興行（浄瑠璃、浪花節、琵琶）

◆：その他興行（踊、講談、曲芸・奇術、武術など）

▲：活動写真の興行

□：集会（演説会、講演会、総会、講習会など）

○：発表会（文芸会、学芸会、演奏会、插花会など）

△：その他用途（罫置・商品の陳列・販売など、興行・集会・発表会以外のもの）

②：内容不明のもの

また、「収支計算書」には座名・演者名（～一座、～一行など）のみが記載され、それだけでは演目の内容・時期を特定できないものも多い。その場合、木村亀太郎資料に含まれる個別興行記録（一部のみ残存）や、安田宗生編『近代熊本の劇場、活動写真、及び大衆演芸』（2007）、『八千代座100周年記念誌』（2012）³を参照し、座名・演者名を手掛かりにできる限り上記分類を判別するように努めた。さらに、年度ごとの演目種別・日数・席料を記載した表1～24の総括として、24年分の総収入高・年間使用日数と、各演目種別の日数およびその比率を記した表25を作成した。これらに基づき八千代座における演目種別の特徴と変化の読み取りを試みる。

2. 八千代座の演目種別の概観

次に、24年間の状況の変化を、主として総収入高の推移を目安に、以下のように3期に時期区分して見ていく。

①開場期（明治44～大正6年度[1911.5～1918.4]）

②最盛期（大正7～大正14度[1918.5～1926.4]）

③転換期（大正15～昭和9年度[1926.5～1935.4]）

2-1. 開場期（1911～1918）の演目種別

八千代座は、明治43年（1910）3月6日に劇場組合総会が開かれて設立が決議され、同年12月山鹿に竣工した。柿落しは、明治44年1月11日より、大阪から来演した松嶋家松暁・岩井半之助・市川新之助一座による歌舞伎興行が賑々しく行われた。この公演は、もともと明治41年（1908）に開場した熊本の大和座の初興行（明治44年1月1日より）のために来演した松嶋家一座が、同座の電気工事による休演期間中、山鹿の八千代座での柿落し公演に回り、1月21日から再び大和座で興行を続けたものだった⁴。この例に限らず、八千代座の興行と複数の劇場を擁する熊本との関係は重要だが、ここでは立ち入らない。

初年度（1911-12）の状況をみると、地元で活躍する女役者の嵐徳三郎座・嵐三桐（三津桐）座、新派の伊東文雄、壮士芝居の黒田良助一座などの演劇興行、浪花節の桃中軒雲介・桃中軒雲平、義太夫節の豊竹小糸一座の音曲興行が行われた一方で、山鹿在郷軍人会・山鹿青年会など地元団体の集会、演説会、文芸会、柔道試合などの催しも開かれた。養蚕業が盛んなこの地域特有の用途として繭乾燥のための劇場貸し出しもあった。しかし初年度には、大正期に演劇興行と並ぶ柱となる活動写真や連鎖劇の興行はまだ見られない。

ここから、分類ごとに使用日数を合計し比率を出してみると、演劇興行■69日余⁵（48%）、音曲興行●27日（19%）、その他興行◆3日（2%）、集会□11日（8%）、文芸会○6日（4%）、その他用途△20日（14%）、内容不明②7日（5%）となり、演劇興行が半数に近い。これに音曲興行を加えると67%となり、全体の約3分の2を占めていたことになる。

このように、八千代座は開場当初から、新旧各種の芝居や浪花節といった当時の庶民が好んだ娯楽の提供を中心に据えつつも、演説や集会等の硬めの催しから地場産業へのスペース提供まで、地域内の多目的ホールとして機能していた。これは、大都市ならば大小の劇場、寄席、音楽ホール、公会堂といった異なる目的をもつ施設が分担する役割を兼ね、その中で経営の安定化を図ったためだろう。ただし、演説や集会は1日ないし数日で、席料も1日あたり2～3円と、芝居に比べ10分の1以下にすぎず、明らかに興行系の催しとは別扱いだったものと思われる。大正2年度（1913-14）に山鹿小学校が初めて学芸会を八千代座で開催した際の席料も4円46銭である。内容不明の催しもあるが、全体としてみると、当然ながら日数でも収入高においても、歌舞伎式劇場本来の用途に即した演劇興行が最も多く、八千代座の経営上の柱となっていた。中でも、多くの集客が見込める8月の灯籠祭、正月興行、4月の温泉祭には、毎年まとまった日数の演劇興行が行われ、大きな収益を挙げた。

その後、明治45年度（1912-13）以降、大正6年度（1917-18）までの八千代座の演目で目立つのは、活動写真と連鎖劇、浪花節と節劇の増加であろう。連鎖劇とは、活動写真と芝居を組み合わせた新芸能であり⁶、節劇は、浪花節に合わせて役者が演技する芝居だった⁷。これらは今日まで伝存せず、忘れられた存在になっているが、当時は相当に流行し、とくに節劇は九州では非常に人気があった。八千代座の演目に、活動写真が初登場するのは明治

45年度の「木下活動写真」「西村活動写真」、連鎖劇は大正3年度(1914-15)の「志村松之助連鎖劇」、節劇も同じく大正3年度の「浪花節少女身振」「広沢節劇」からである。少女劇は、今日のアイドルグループの舞台に近い存在だったのではないかと推測されるが、八千代座にも大正から昭和期まで切れ目なく各地の少女劇団が来演し、大きな収入を挙げている。その中には「収支計算書」に表記はないものの、少女節劇の一座も含まれる。

こうした新傾向と並んで、山鹿二〇加、熊本二〇加(運船組、利幸商組、マチャン組)や菊池の四丁分操人形座、嵐徳三郎・嵐三津桐ら地元の女役者一座、さらに唐尾座(福岡県瀬高町小田の唐尾八坂神社の奉納芝居に始まる一座)、佐賀二〇加出身の節劇一座・佐賀峯吉一行など、熊本県内や福岡・佐賀からの来演者による興行も続いていた。これも、近世から在地の芸能者集団による巡演慣行があったこの地域の特徴といえる。また、山鹿生まれで久留米の宮原檢校門下の美之一に地歌箏曲を学んだ小井出トイ⁸(1840～1918)が、十年余に及ぶ東京での教授生活を終えて大正6年(1917)に帰郷し、八千代座で「小井出トイ歌の会」を開いたことも特筆される。その前後にも、大正9年度の「小井出勾当氏追善の会」を挟み、「琴の会」(箏曲の会)が大正6・8・10～12年度に年1回開催された。

2-2. 最盛期(1918～1926)

ヨーロッパが第一次世界大戦の戦場となった大正期には、日本も開戦直後の不景気から徐々に好景気に転じる。こうした社会状況は八千代座の総収入高の推移にも影響し、大正7年度(1918-19)以降、ピークとなる大正12年度(1923-24)まで総収入高が増加する。劇場の稼働日数も、大正10年度(1921-22)から12年度にかけては、年間200日前後の最高値を記録する。また、大正8年(1919)には山鹿にも電気が通じ、初の常設活動写真館となる朝日館が落成した。朝日館では1階を畳敷にし、活動写真のほかに演芸興行も行っていた⁹。そうした中、八千代座での活動写真興行も平均して年20日以上行われていた。

この時期、いっそう存在感を増すのが、浪花節と節劇、そして地元出身の筑前琵琶奏者・伊織直記(旭風)による琵琶と琵琶劇¹⁰の公演である。伊織は、鹿本郡広見村出身で、すでに明治45年度に3日、大正6年度(1917-18)にも2日琵琶会を開催していたが、大正7年度(1918-19)には2日間の琵琶大会のほかに、初めて「琵琶劇」を11日間興行した。つづく大正8年度(1919-20)も「琵琶節劇」を5日、「伊織両面劇」を13日間興行している。「両面劇」は九州独特のもので、内容は時期によっても異なるが、男優・女優の一座(混合芝居)、女芝居二座の合同公演(両面歌舞伎)、新派(新劇)と歌舞伎(旧劇)の合併公演(新旧両面芝居)等々、さまざまな異種芝居を組み合わせた興行で「一日に二日分を見る」割安感があるため人気を呼んだという¹¹。大正期に来演した花房芳香一座の「花房両面劇」は、新派と節劇をかけたものだった。「伊織両面劇」の内容は不明だが、少なくとも琵琶劇が含まれたはずであり、同じ年度の「琵琶節劇」の表記を考えると琵琶劇と節劇の混成芝居だっ

た可能性が高い。13日間で1257円もの収益を挙げており、最盛時の大変な人気ぶりがうかがえる。ただし、その後は大正10年度の「追善琵琶会」1日、11年度の「琵琶大会」2日、12・14年度の「琵琶会」1日を最後に伊織の名は消え、八千代座での琵琶興行自体も、昭和2年度の「熊本琵琶会連中」2日をもって最後となった。両面劇も、大正8・9・11年度まで複数の興行が続くが、その後は昭和6・7年度に一度ずつ来演するのみとなる。

この時期に全国的に流行した安来節は、大正9年度(1920-21)を初回に、4度興行があった大正13年度(1924-25)を経て、大正14年度・昭和2年度(各1回)まで来演が続いた。また、大正9年度に開催された「演奏会」は、大正7年(1918)4月に結成された山鹿音楽同好会が主催し、熊本同好会と共演したものだ¹²。大正13年度(1924-25)の「明大演奏会」は、13年7月開催の明治大学ハーモニカ・ソサイティーによる演奏会である¹³。西洋音楽はこの頃地方にもかなり浸透し演奏会も開かれるようになってきていた。

2-3. 転換期(1926～1935)

大正15年度(1926-27)になると、総収入高が最盛期以前の大正6年度(1917-18)の水準に戻り、以後も回復しない。この時期には、大正中期まであった繭置場などのその他用途はほぼなくなり、興行日数も全般に短縮されて、その分興行件数が増える。演目種別にも変化が現れるが、興行の中では浪花節と節劇の比重がさらに高くなる。逆に、大正時代に流行した連鎖劇は、昭和期に入ると八千代座でも大正15年度の「徳川連鎖劇」4日、昭和2年度(1927-28)の「入船連鎖劇」2日、昭和3年度(1928-29)の「西川秀ノ助連鎖劇」5日を最後に、姿を消す。両面劇については、前述した通りである。

これに代わって、この時期に新たに登場するのが万歳(漫才)である。昭和2年度の「秋本五郎万歳一行」を皮切りに、昭和8年度は3興行、昭和9年度は5興行を数える人気演目となる。入れ替わるように、かつて毎年のように行われた地元の山鹿二〇加・熊本二〇加の興行は姿を消し、博多二〇加のみとなる。活動写真は、朝日館を始めとする常設館ができた影響もあるだろうが、八千代座での興行は毎年20日以上あった最盛期に比べると、8～32日と年ごとの変動が大きくなる。内容は、表記から報道・広報ものが多い傾向がうかがえる。

また、昭和7年度(1932-33)に行われた「ラジオ—山鹿の夕」は、昭和3年に開局した熊本放送局(JOGK)による八千代座からの実況放送であり、当日は「君が代」演奏に始まり、「子どもの時間」「山鹿俚謡」「ハーモニカ合奏」「管絃楽演奏」等、当時山鹿にあったさまざまな音楽が全国に発信された¹⁴。昭和8年度(1933-34)には地元の音楽愛好団体による「鹿本楽友会演奏会」も開催された¹⁵。

3. 八千代座で聞こえていた音楽

さて、こうした状況にあった八千代座において、一体どのような音楽が聞こえていたのだろうか。全体を通して、音楽ジャンルとしては、明治期に芸能化した新興の語り物である浪花節の存在感がきわめて大きい。九州は元来、浪花節が盛んな土地柄であり、八千代座でも毎年行われていた音曲興行は浪花節のみであり、多彩な浪曲師の一座が年に何組も入れ替わり興行していた。これに節劇、少女身振・少女節劇などを加えると、八千代座で最も頻繁に聞こえていたのは浪花節だったのではないだろうか。それに比べると、近世から引き継がれた浄瑠璃（義太夫節）は、八千代座が開場した明治末期以降は興行が減り、人形芝居や素人大会を含めても大正期から昭和初期には年1～2回程度となっていた。近代に普及した琵琶の場合はより限定的だが、地元出身の伊織直記による筑前琵琶会が明治45年度に初登場し、最盛期の大正期には伊織による琵琶会や琵琶劇の興行が連続開催されていた。一方で、薩摩琵琶と明示されたものは大正5年度の「薩摩琵琶弾奏会」1日にすぎない。地歌箏曲関係でも、山鹿出身の小井出トイの会とその追善会、琴の会が大正期に年1回開かれていたが、これらは地域での音楽活動に根差した音曲興行・演奏会といえるだろう。三味線音楽では、浄瑠璃を除くと単独の音曲興行は行われていないが、後述するように、演劇興行や踊りの興行、券番温習会などでは頻繁に三味線音楽が聞かれていたと考えてよい。

西洋音楽は、熊本周辺にも明治期から学校などを通して入っており¹⁶、大正から昭和期にかけての山鹿小学校の学芸会（演奏会、奏演会、雛祭などもあり）や、大正5年度（1916-17）の熊本盲啞学校学芸会では、唱歌などが披露された可能性が高いだろう。学校以外でも、西洋楽器の購入や同好者団体の結成が山鹿でも行われ始めていた。しかし、西洋音楽を中心とした催しは、前述した大正8年度の山鹿音楽同好会による「演奏会」、大正13年度の明大ハーモニカ・ソサイティーの「明大演奏会」、昭和8年度の「鹿本楽友会奏演会」の3件に限られる。これは、八千代座が劇場であって音楽ホールではないことも一因かもしれない。山鹿に、いわゆる「日本音楽」のすべてが存在していた訳ではないが、大きく見ると、明治末期から昭和初期までの八千代座の歩みは、近世からこの地域で享受されていた浄瑠璃・箏曲・長唄などに加えて、近代に種目化した浪花節・筑前琵琶・西洋音楽などが普及していく過程にほぼ重なっている。

一方、全期間を通して稼動日数の半数以上を占める演劇興行では、音楽ジャンルは長唄などの三味線音楽を中心としながらも、西洋音楽も含めたジャンル混合の様相が常態だったと推測される。というのも、演劇興行でも八千代座で演じられたのは歌舞伎よりも新派や壮士芝居が多く、これらの芝居では歌舞伎に用いる三味線音楽に加えて、劇中で実際に聞こえている音という想定で、当時の新しい音や西洋楽器も使われたからである¹⁷。また、活動写真

でも、無声時代には弁士のほかに和洋楽器混成の楽隊が、映写中のみならず幕間や街頭宣伝でもライブ演奏を繰り返していた¹⁸。八千代座の事例ではないが、大正3年(1914)4月と大正4年(1915)6月に熊本の和座に来演した駒田好洋率いる活動写真が「ストリング合奏」で長唄《勸進帳》や《越後獅子》を演奏するという新聞記事があり¹⁹、西洋曲に加えて、ヴァイオリン等の西洋楽器による邦楽曲の演奏も普通に行われた。広く流通した邦楽曲は、軍楽隊のレパートリーにも取り上げられ、明治38年(1905)に東京で始まった陸海軍楽隊の日比谷公園奏楽でもしばしば演奏されており²⁰、全国的に当時の人々の耳によく馴染んでいた。活動写真と芝居が組み合わされた連鎖劇の音楽内容はよくわかっていないが、新派劇との連鎖であれば、やはり種々の和洋折衷的な音楽が使われただろう。

こうしてみると、通例一つの音楽ジャンルで行われる音曲興行とは異なり、近代の演劇興行では和洋楽器を併用したジャンル混合の音楽が一般的であり、こうした場で聞かれた音楽は、レコードや放送などの新しいメディアを介して1920年代後半に新たな流行音楽が誕生するまで、近代日本の大衆音楽の中核をなしていたと考えられる。山鹿の八千代座に通った人々も、純粋な西洋音楽でも純粋な邦楽でもなく、和洋折衷のジャンル混合音楽を取り混ぜて耳にしていた。劇場・寄席・音楽ホールなどの機能を併せ持つ地域劇場では、それがごく当たり前の姿だったのではないだろうか。

4. 帝国劇場と東京音楽学校奏楽堂

山鹿に八千代座が設立されたのと同じ明治44年(1911)3月1日、東京の日比谷に日本最初の本格的洋風劇場である帝国劇場が誕生した。帝国劇場は明治中期からの演劇改良運動を背景に建設された私立の劇場であり、オペラやバレエなど洋物の舞台上演に加えて、外国貴賓に日本の伝統芸能を紹介することも想定し、オーケストラ・ピットとともに取り外し可能な花道が設置された和洋折衷の劇場となった²¹。開場の翌年(1912)には、ロンドンからイタリア人振付師ローシー(1867～?)を招いてオペラやバレエを上演する一方、歌舞伎やシェークスピア劇の上演も行い、帝国劇場はまさしく「歌舞伎も上演できる洋風劇場」となる。当時の日本にはオペラ歌手やバレエの専門家はおらず、帝国劇場には歌劇部(のちの洋楽部)という養成機関が設置され、ローシーはその指導にもあたった。帝国劇場の建設は、そこで上演するオペラやバレエの人材養成にも波及したのである²²。

一方、公教育での唱歌の実施のため明治12年(1879)文部省に設置された音楽取調掛を母体に、明治20年(1887)に東京音楽学校が設立され、明治23年(1890)には上野の新校舎に日本初の音楽専用ホール・奏楽堂が建設された。開校当初は、音楽教師を養成する師範部(のちの師範科)と、音楽師を養成する専修部が本科に並立していた東京音楽学校だが、設立目的に照らして、劇場で活躍する歌手や楽師などの人材養成は想定していなかったと考えられる²³。

明治期の奏楽堂では、ピアノや弦楽器による独奏曲・合奏曲や、作歌された日本語歌詞を付した合唱曲など、西洋曲が多く演奏されたが、俗曲改良事業²⁴を担った山田流の山勢松韻らの箏曲なども含まれていた。明治40年(1907)に東京音楽学校内に邦楽調査掛が設置されると、ジャンル横断的な邦楽演奏会も開催されるようになる。これは、ジャンルにより演奏の場を異にしてきた邦楽界では非常に斬新な試みだった。しかし、奏楽堂では基本的に、異なる音楽ジャンルを並列はしても、和洋折衷音楽やジャンル混合音楽はほとんど演奏されず、興行的な催しへの貸出も行われていない。奏楽堂が東京音楽学校での教育研究の成果発表と不可分に結びついた「学校ホール」であることによる制約も大きい。音楽ホールでは主役である音楽を専心聴取する空間であることが最重視され、劇場特有の非日常性や娯楽性を優先した音楽の選択的使用や混ぜ合わせは元来なされにくいのではないだろうか。

このように、同じ明治44年(1911)の日本を切り取っても、山鹿の八千代座で聞こえていた音楽と、東京の帝国劇場や奏楽堂で聞こえていた音楽には大きな隔たりがあった。専門家養成と結びついていた帝国劇場や奏楽堂に対して、八千代座では地元の人々が享受する音楽・芸能の興行や自演以外は、近隣や遠方の各地からの巡演興行を受け容れる立場にあった。その結果として、条件の異なるそれぞれの地域や空間に特有の音楽が響くことになるのだが、これまで近代日本の音楽史記述において主軸となってきたのは、数多くの劇場・寄席・音楽ホール・公会堂などが並立し機能を分け持つ東京や大阪などの大都市の事例であり、そこで進行した音楽ジャンルごとの変化への関心であったといえる。これに対して、地域の多目的な用途に用いられた八千代座の演目種別は、ある地域で一定期間に聞こえていた音楽の総体とそのバランス変化を定点観測することを可能にし、地域全体の音楽変化の研究への新たな糸口を提供するものであった²⁵。また、巡演興行のあり方に着目するならば、近年、研究の進展が著しい明治期から昭和戦前期の台湾・朝鮮・満州などの植民地や外地における音楽享受状況との比較という視点も浮上する。八千代座とその関係資料は、こうした音楽史記述の前提を揺さぶり、新たな着想を促す重要な存在となりうるのではないだろうか。

注

- 1 山鹿は、熊本を起点とする豊前街道の最初の宿場であり、古くから温泉場としても知られ、県北の商工業の中心地であった。復興に至るまでの八千代座の歴史の変遷は、『八千代座100周年記念誌』(山鹿市：八千代座100周年記念事業実行委員会、2012年)に詳しい。八千代座は、大正12年(1923)に最盛期を迎えた後、昭和30年代には映画館に改造され、40年代以後は老朽化した。昭和62年に市民からの寄付をもとに修復が始まり、劇場を所有する八千代座組合が八千代座を山鹿市に寄付し、翌昭和63年12月には国指定重要文化財の指定を受けた。平成8～13年の大修理を経て、現在に至っている。

- 2 ただし、昭和10年度「収支計算書」は欠、昭和11～13年度は席料の内訳記載がない。
- 3 安田宗生編『近代熊本の劇場、活動写真、及び大衆演芸』熊本：龍田民俗学会、2007年。安田による論考「近代熊本の劇場」「熊本活動写真史」「近代熊本の大衆演芸」のほか、各新聞から抽出した明治大正期の「熊本の劇場及び活動写真関係新聞記事」を収録する。また、『八千代座100周年記念誌』には「山鹿・八千代座文化年表」が収録され(75～185頁)、年表中には「収支計算書」収入之部も掲載されている。
- 4 安田「熊本の劇場及び活動写真関係記事」236～239頁(明治43年12月27日、44年1月10日、1月21日『九州日日新聞』)。松嶋家一座は、明治44年10月にも八千代座で興行を行ったらしく(同上、明治44年10月2日『九州日日新聞』)、木村亀太郎による14日間600円の興行がそれに該当すると推測される。
- 5 初年度の木村亀太郎による一興行の日数記載を欠くため。実際は69日を越えていた。
- 6 横田洋「連鎖劇とその変容—興行資料にみる大正期の映画と演劇の関係」神山彰編『忘れられた演劇』(近代日本演劇の記憶と文化1) 森話社、2014年。204～240頁。「連鎖劇」という呼称は大正2年(1913)の大阪に始まるが、演劇と映画を組み合わせる試みはそれ以前から行われていた。また、連鎖劇には映画主体・演劇主体の二種類があり、連鎖劇が流行した大正年間でも、後年になるほど実演の割合が増える傾向にあったという。
- 7 神山彰「節劇・剣劇・女剣劇」神山編『忘れられた演劇』、前掲、242～276頁。節劇は、時代・地域により名称・内容とも多様だった。九州では明治40年代に節劇の人气が高まり、少女による娘身振芝居、娘節劇も盛んだった(安田「近代熊本の大衆演芸」67～69頁)。
- 8 平野健次執筆「小出トイ」『日本音楽大事典』平凡社、1987年。小井出は地歌三絃の名手で耳が非常によく、明治38年に上京し長く三番町で教授した。熊本は芸事として地歌が盛んな地であった(河内登志代「小井出とい子師の事ども」『三曲』大正15年6・7月)。
- 9 安田「熊本活動写真史」47頁。大正10年10月30日から1週間、帰省中の伊織旭風による筑前琵琶弾奏会が行われた(安田「熊本の劇場及び活動写真関係記事」343頁、大正10年10月31日『九州新聞』)。
- 10 澤井万七美「琵琶劇論争—明治末期から大正期の琵琶界」後藤静夫編『近代日本の音楽・芸能の再検討』京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、2010年、109～123頁。琵琶劇は明治39年(1906)下関に発祥し、大正半ば以降、批判の強かった琵琶界内部でも承認されるに至った。
- 11 安田「近代熊本の大衆演芸」63～64頁。
- 12 『八千代座100周年記念誌』95頁。山鹿音楽同好会を結成した大森健作は、明治41年舶来のストップ付大型オルガンを、大正8年にはチェロも購入した(同上、86・100頁)。
- 13 『八千代座100周年記念誌』106頁。大正12年に山鹿ハーモニカ・ソサイティーが結成され、公会堂で第1回発表会を開催していた(同上、104頁)。
- 14 『八千代座100周年記念誌』204頁。

- 15 鹿本音楽研究会と鹿本ハーモニカ研究会共催の映画・音楽・舞踊の夕べ（同上、114頁）。
- 16 森みゆき「明治期の熊本の新聞における西洋音楽関連記事調査①—九州日日新聞 明治21～25年」『尚絅大学研究紀要 人文社会科学編』第47号、2015年3月、同「明治期の熊本の新聞における西洋音楽関連記事調査②—九州日日新聞 明治26～30年」『尚絅大学研究紀要 人文社会科学編』第48号、2016年3月。
- 17 土田牧子「明治末期新派における音楽演出—新派らしさの確立」『第10回日中音楽比較研究国際学術会議論文集』、2013年、474～78頁。八千代座に残る黒田良助一座の奉納額（明治45年2月11日から興行）によると、「新派純劇」のこの一座には、囃子（長唄1人・三味線2人・鳴物1人）に加えて、楽長と純劇付音楽隊（人数不明）がいた。演目は、佐藤紅緑作《俠艶録》10齣とダンテ神曲の《フランチェスカ悲恋》5齣であった。黒田一座（瓢会と名乗る場合もあり）は、その後も昭和期まで継続的に八千代座に来演している。
- 18 今田健太郎「無声映画の音」『東洋音楽研究』第65号、2000年8月、33～53頁。
- 19 安田「熊本の劇場及び活動写真関係新聞記事」283頁（「今晚のストリング合奏は長唄勸進帳なりといふ」大正3年4月16日『九州日日新聞』）、291頁（「今晚のストリング合奏は長唄越後獅子なり」と大正4年6月15日『九州日日新聞』）。
- 20 谷村政次郎『日比谷公園音楽堂のプログラム』つくばね舎、2010年。邦楽曲はほぼ各回に1曲で（ない場合もある）、明治38～39年の演奏会では、長唄《老松》《雛鶴三番叟》《越後獅子》《勸進帳》《安宅の松》《喜撰》《汐汲》、箏曲《六段》《秋の七草》が曲目に含まれていた。
- 21 嶺隆『帝国劇場開幕』中央公論社、1996年。
- 22 増井敬二『日本オペラ史～1952』水曜社、2003年、82～117頁。ここで育った東京音楽学校出身の原信子・清水金太郎らは、大正5年帝国劇場の契約満了後に赤坂ローヤル館に移ったローシーとオペレッタ上演を続け、やがて浅草オペラでも大活躍する。
- 23 東京音楽学校での初のオペラ上演は、明治35年（1902）奏楽堂で上演されたグルック作曲《オルフォイス》だが、これは生徒の自主活動だった。明治41年（1908）の《オルフォイス》再演計画の中止後、昭和7年（1932）にクルト・ヴァイル作曲の学校オペラ《ヤーザーガー》が上演された以外、東京音楽学校でオペラ上演はなされなかった。
- 24 音楽取調掛で箏曲と長唄を中心に、主として邦楽曲の歌詞改良を行った事業。その成果は東京音楽学校昇格後の明治21年（1888）に、五線譜の『箏曲集』として刊行された。
- 25 筆者は、音楽・芸能の専門家数に着目して戦前の東京における邦楽の変化を分析したことがある（塚原「戦前の東京における邦楽」クロッペンシュタイン・鈴木貞美編『日本文化の連続性と非連続性—1920年～1970年』勉誠出版、2005年、435～472頁）。

*付記：本稿は、平成28～30年度科学研究費補助金（基盤研究（B））「熊本県山鹿市の歌舞伎（式）劇場・八千代座に関する総合的史料研究」（山崎浩隆研究代表）による研究成果の一部である。

熊本県山鹿市八千代座の演目種別から見えてくるもの

表1 明治44年度(1911-12)

収入高 3818 円 96 銭

<ul style="list-style-type: none"> ■嵐徳三郎座 (12日、475円) □山鹿在郷軍人会 (1日、2円) □鹿本郡料理店 (1日、1.50円) □山鹿青年会 (1日、3円) ○文芸会 (3日、7円) □高島周易演説 (1日、2円) ■伊東文雄 (12日、330円) □高校校伝演説 (3日、15.63円) ●宮川左近一座 (8日、210円) 	<ul style="list-style-type: none"> □松田正久演説 (1日、11.30円) ②花園講演 (6日、58円) ◆柔道試合 (3日、105円) ②灯笼祭ノ節 (1日、36円) △藪乾燥席貸し (20日、20円) □軍人送別会 (1日、2円) ●豊竹小糸一座 (7日、60円) ○熊本文芸会 (3日、20円) □青年会演説 (1日、2.50円) 	<ul style="list-style-type: none"> ■木村亀太郎 (14日、600円) ■監獄太郎 (2日、40円) ●桃中軒雲介 (7日、87円) ●黒田良助一座 (12日、460円) □軍人演説 (1日、1円) ●桃中軒雲平 (5日、70円) ■中川一座 (14日、400円) ■木村亀太郎 (?、450円) ■嵐三桐一座 (3日、65円)
--	--	--

表2 明治45年度(1912-13)

収入高 3679 円 24 銭

<ul style="list-style-type: none"> □医会 (1日、5円) △元官商会陳列 (20日、30円) ▲木下活動写真 (4日、43円) △本田富五郎生誕 (7日、7円) ■黒田良助 (10日、275円) □山鹿青年会 (1日、3円) ■唐尾座 (10日、180円) 	<ul style="list-style-type: none"> ■黒田良助 (8日、195円) ▲西村活動写真 (8日、140円) ○熊本盲啞学校文芸会 (3日、35円) □山鹿青年会 (1日、2.50円) ■武智元良一行 (12日、265円) ●筑前琵琶伊織直記 (3日、45円) ●宮川一行 (10日、500円) 	<ul style="list-style-type: none"> ■黒田一行 (11日、410円) ■蛇シウ一行 (4日、128円) ■女芝居 (6日、150円) ②菊エ門一行 (5日、70円) ■松嶋家一行 (8日、210円) ●雲月一行 (5日、75円) ■原良一一行 (12日、891.10円)
---	--	---

表3 大正2年度(1913-14)

収入高 3570 円 25 銭 5 厘

<ul style="list-style-type: none"> ●篠田実一行 (5日、75円) ▲広島孤児院 (2日、15円) □山鹿教育会 (2日、6円) ▲クラブ活動写真 (2日、30円) ■大井丸山一行 (10日、250円) □大久保氏演説会 (1日、3円) ■喜劇一行 (10日、150円) □花田中佐演説会 (1日、3円) ◆一心齋一行 (5日、120円) ▲大阪毎日新聞社活動写真会 (1日、14.745円) 	<ul style="list-style-type: none"> □電気会社講話会 (1日、2円) ■熱海一行 (2日、60円) □町村長列講話会 (1日、3円) ●雲昇一行 (11日、270円) ■山鹿二〇加 (2日、20円) ▲鳥取孤児院活動写真 (3日、20円) ●雲左衛門一行 (5日、65円) □山鹿町青年同志会 (1日、3円) ■山鹿二〇加 (2日、20円) ■嵐徳三郎一行 (10日、600円) ■大正倶楽部一行 (12日、420円) 	<ul style="list-style-type: none"> ▲桜島活動写真 (4日、80円) ●雲月一行 (7日、125円) ○山鹿小学校学芸会 (1日、4.46円) ■#浪花政吉一行 (15日、617.50円) □九州日日新聞社演説会 (1日、13円) ●佐賀丸一行 (2日、20円) ●如雲一行 (6日、100円) ■熱海一行 (14日、350円) □鹿本郡愛国婦人会 (1日、3円) □山鹿町医師会 (1日、2.50円) ▲世界館活動写真会 (3日、60円)
---	---	--

表4 大正3年度(1914-15)

収入高 2862 円 61 銭

<ul style="list-style-type: none"> ■熊本二〇加 (2日、25円) ▲活動写真 (2日、40円) ▲クラブ活動写真 (2日、30円) □鹿本郡教育会 (1日、6円) ■熊本二〇加 (1日、14円) ■*志村松之助連鎖劇 (10日、275円) ◆レト演芸会 (2日、30円) ▲活動写真 (2日、35円) ◆山鹿手踊 (1日、20円) □鹿本郡教員講習会 (7日、21円) ■新派劇 (1日、25円) 	<ul style="list-style-type: none"> ▲活動写真 (3日、45円) ▲鹿児島孤児院活動写真 (2日、24円) ■操人形 (3日、40円) ▲活動写真 (3日、45円) ◆自転車曲芸 (3日、35円) ▲活動写真 (1日、15円) □山鹿青年会 (1日、2円) □山鹿軍人会 (1日、2円) ■#浪花節少女身振 (11日、210円) ■#浪花政吉 (12日、545円) ▲活動写真 (1日、15円) 	<ul style="list-style-type: none"> ●少年浪花節 (5日、44円) ▲忠臣蔵活動写真会 (4日、48円) ■黒田一行 (12日、285円) ●小雲一行 (6日、30円) ●浪花節吉田佐賀丸 (3日、30円) ■#広沢節劇 (7日、70円) □政談演説 (1日、17円) ◆天左一行 (5日、50円) ◆天左一行 (5日、50円) ■荒川博士一行 (11日、650円) ◆天一一行 (3日、37.50円)
---	---	---

表5 大正4年度(1915-16)

収入高 2707 円 66 銭

<ul style="list-style-type: none"> ●中川一行(2日、25円) ○素人演芸会(2日、22円) ■山鹿二〇加(2日、22円) □教育会鹿本郡支会(2日、6円) ■沢村源之丞一行(11日、200円) □政談演説会(1日、20円) △山鹿町呉服連合店売出し(5日、21円) □鹿本郡教育会講習会(6日、18.40円) ■#佐賀峯吉一行(8日、130円) □政談演説会(1日、20円) 	<ul style="list-style-type: none"> ■僧侶劇一行(8日、122.50円) ◆講談東操一行(6日、60円) ▲森永活動写真会(1日、15円) ◆杉山善次郎講談会(1日、10円) ▲活動写真会(3日、33.40円) □山鹿町在郷軍人会(1日、2円) □鹿本軌道総会(1日、7円) ●吉田奈良女一行(3日、21円) ■#佐賀峯吉一行(17日、540円) ◆東操講談(5日、50円) ■黒田一行(12日、320円) 	<ul style="list-style-type: none"> □キリスト教(1日、4円) □日蓮主義講演会(1日、3円) ■運船組二〇加(2日、20円) □郡役所(1日、3円) ▲電気館活動写真(3日、36円) ■嵐三津柳一行(10日、150円) ■#温泉祭興行佐賀峯吉(14日、812.86円) ▲大阪朝日新聞活動写真(1日、13円) □山鹿納税組合(1日、0.50円)
---	---	---

表6 大正5年度(1916-17)

収入高 3646 円 04 銭

<ul style="list-style-type: none"> ○熊本文芸会(5日、75円) ▲大阪毎日新聞活動写真(1日、13円) ■四丁分操人形(5日、65円) ◆居合術金房千代子一行(3日、36円) ○琴大会(1日、5円) △蘭置(7日、7円) □鹿本郡教育会(2日、6円) ■新派菅原一行(7日、140円) ○熊本盲哑学校学芸会(2日、10円) ◆玄海仙人術(2日、22円) △山鹿町呉服店連合売出し(3日、12円) 	<ul style="list-style-type: none"> □鹿本郡教育会(6日、18円) ■灯籠祭興行北村一行(8日、149円) ▲地球館活動写真(2日、22円) ■旧劇二〇加(6日、115円) ●薩摩琵琶弾奏会(1日、5円) ■黒田一行(10日、260円) ■鹿兒島少女劇(5日、90円) ②実業会余興(1日、5円) ■*新派連鎖劇(4日、80円) ■#節劇藤田一行(6日、70円) 	<ul style="list-style-type: none"> ■#節劇尾上民之助一行(12日、716円) ◆東操講談(3日、36円) ■四丁分操人形(5日、65円) ■黒田一行(11日、343.75円) ■衛生劇(2日、15円) ■中村時助一行(7日、155円) ■松島家一行(10日、225円) ■#節劇松川八百三郎一行(16日、872.50円)
--	--	--

表7 大正6年度(1917-18)

収入高 4082 円

<ul style="list-style-type: none"> ●天中軒雲月(3日、54円) ▲妹尾活動写真(4日、40円) ◆熊本芸妓手踊(2日、24円) △蘭置(13日、15円) ▲藤本活動写真(4日、40円) □鹿本郡教育会(2日、6円) ■新派睦劇(12日、247.50円) ■熊本二〇加(2日、24円) ■#節劇青年団一行(7日、120円) □鹿本郡教育講習会(5日、15円) ■灯籠祭興行(4日、120円) ②無我天人(5日、37.50円) ●伊織直記琵琶会(2日、20円) △蘭置(2日、2円) ◆新町子供手踊(1日、10円) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆末広亭講談(3日、36円) ▲藤本活動写真(3日、37.50円) ■女優優川友一行(7日、140円) ●津田栄子琵琶会(1日、10円) ■女優優川友一行(2日、15円) ■瓢会黒田一行(10日、280円) ▲雲井活動写真会(5日、57.50円) □山鹿明正会(1日、5円) ○插花大会(1日、4円) ■女優優一月興行(10日、611円) ○小井出トイ歌の会(1日、5円) ▲岸田活動写真(3日、30円) ■#少女身振劇福円一行(12日、340円) ▲吉川活動写真(4日、55円) 	<ul style="list-style-type: none"> ●軍談吉田常夫一行(3日、45円) ■新派劇木村一行(11日、275円) ■大阪二〇加志賀廻一行(7日、147円) □軍人会(1日、3円) ■*扶桑会連鎖劇(6日、121円) ▲妹尾活動写真(3日、30円) ■松井須磨子一行(2日、70円) ▲日米活動写真(3日、45円) ●山鹿藍生会琵琶会(1日、12円) ■#千歳家少女劇温泉祭興行(11日、915円) □神職講習会(1日、3円) □国権党演説会(1日、15円)
--	---	---

熊本県山鹿市八千代座の演目種別から見えてくるもの

表8 大正7年度(1918-19)

収入高 6042 円 57 銭

<p>■喜劇志賀廻家一行(4日、65円) ■女俳優合同一座(6日、82.50円) ●豊竹呂昇一座(3日、80円) ●天中軒雲月一行(3日、54円) □鹿本郡煙草小売人総会(1日、3円) ■新派辰巳会一行(8日、185円) ■*連鎖劇一行(5日、125円) ▲日米活動写真(4日、47円) ■灯籠祭小松正夫一行(6日、135円) □米国学士講演会(1日、7円) ■衛生劇(1日、5円) □鹿本郡教育講習会(5日、15円) ▲妹尾活動写真会(5日、70円) ▲キネトホン活動写真(3日、45円) ■新派辰巳会一行(7日、210円)</p>	<p>■中村仲太郎一座(5日、150円) ▲大阪毎日新聞社活動写真(1日、15円) ▲欧州戦争活動写真(3日、47.50円) ●伊織直記琵琶大会(2日、30円) ◎実業界余興(3日、7.96円) ■女俳優一座(1日、17.50円) ▲相撲館活動写真会(3日、45円) ◆松旭齋天一一行(3日、60円) ■#節劇大阪家五郎一座(9日、170円) ■新派幸団一行(7日、130円) ■一月興行小松正夫一行(13日、727.65円) ■#東京旧劇青年団一座(4日、160円) ■瓢会一行(10日、300円)</p>	<p>▲電気館活動写真会(5日、95円) □上田少将講演会(1日、3円) ■操人形一座(2日、35円) ■+伊織直記琵琶劇一行(11日、270円) ▲通信局活動写真(1日、15円) □鹿本鉄道総会(1日、10円) ●浪花節松平春洲一行(4日、60円) ■#浪花政吉一座(11日、300円) □武徳会山鹿支部総会(1日、5円) ▲妹尾活動写真(6日、82.50円) □須永中将講演会(1日、3円) ■温泉祭辰巳会一行(14日、426.76円)</p>
---	--	---

表9 大正8年度(1919-20)

収入高 7292 円 44 銭

<p>■中村福時一行(5日、100円) ■国華座歌劇一行(3日、70円) ▲妹尾合田活動写真(5日、70.27円) △繭置料金(10日、20円) ▲妹尾合田活動写真(3日、20円) ■*ツッパメ会連鎖劇(10日、200円) ■*ツッパメ会一行(1日、25円) ■#少女劇福円一行(7日、120円) ▲軍事活動写真(2日、30円) ■*水野連鎖劇(6日、222.50円) □山鹿町役場講演会(1日、3円) □鹿本郡役所講演会(1日、3円) □政友会政談演説会(1日、15円)</p>	<p>△繭置(6日、12円) ▲妹尾活動写真日野(5日、40円) ■#花房両面劇一行(12日、300円) ▲久保田活動写真(5日、80円) ■来民町少女劇(1日、20円) ■四丁分操人形余興(1日、5円) ■木村猛夫一行(10日、270円) ○宇野先生琴ノ会(1日、7.30円) ○演奏会(1日、10.15円) ■+#旭風会琵琶節劇(5日、112.50円) ▲水野活動写真会(3日、39円) ■新派里正会(4日、100円) □大本教講演会(1日、5円)</p>	<p>■+#伊織両面劇(13日、1257.57円) ■#花房両面劇(13日、640円) ■新派辰巳会一行(16日、455円) ●浪節ちぬの浦一行(4日、80円) ■*中村時之助連鎖劇(6日、150円) ■少女劇一行(4日、125円) ■#浪花政吉一行(9日、300円) □鹿本郡教育会(1日、7.50円) ■四丁分操人形(2日、50円) ■片岡松之助一行(4日、200円) ▲衛生活動写真(3日、60円) □大本教講演会(1日、10円) ■雷風両面劇(10日、2032.65円)</p>
--	--	---

表10 大正9年度(1920-21)

収入高 5675 円 44 銭

<p>▲電気館活動写真(3日、60円) ▲大阪朝日新聞活動写真(1日、20円) △繭置場(17日、51円) ◆松旭齋天洋奇術(3日、105円) ■新派辰巳会(7日、175円) ■消防劇(2日、70円) □蚕糸業講演会(1日、5円) □山鹿水力電気会社総会(1日、10円) ●浪花節東家一行(2日、30円) ■合同両面劇(6日、130円) □鹿本教育会(1日、5円) ▲乃木將軍活動写真(3日、45円) ■#松川八百三郎一行(15日、361.58円)</p>	<p>▲尼港惨劇活動写真(2日、30円) ▲郵便局活動写真(2日、30円) ■来民町少女劇(1日、25円) ■中村芝寛一座(8日、310円) □国勢調査講演会(1日、5円) □金森氏講演会(1日、5円) ■好美団一行(7日、175円) ◆安来節一行(2日、50円) ○小井出勾当氏追善会(1日、7円) ◆拳闘大会(3日、90円) ●浪花節富士月子一行(7日、105円) □山鹿水力電気会社総会(1日、10円) □鹿本教育会(2日、10円)</p>	<p>▲活動写真(1日、15円) ■好美団一行(15日、1151.86円) ●浪花節東家一行(2日、30円) ▲活動写真(3日、75円) ■#節劇河内家一行(12日、410円) ●雲の子浪花節(2日、35円) ▲国難活動写真(3日、90円) ■中村芝寛一座(7日、210円) ▲活動写真(3日、54円) □日蓮上人講演会(1日、5円) ■#河内家一行(8日、180円) ■#三人娘一行(15日、1530円)</p>
--	---	--

表11 大正10年度(1921-22)

収入高7363円70銭

<ul style="list-style-type: none"> ■新派太陽団一行(5日、200円) ●孤泉流舟浪花節(3日、45円) ○宇野先生琴大会(1日、7円) ▲飛行機活動(2日、40円) △繭置料(11日、33円) ■#八千代座十年紀念興行 節劇義勇団一行(8日、350円) □鹿本郡青年会大会(1日、5円) ■#節劇義勇団(8日、160円) □鉄道速成運動報告会(1日、5円) ▲教育活動写真会(1日、20円) □魚市場仲買組合会(1日、5円) □衛生講習会(3日、10円) ■#節劇山下三人娘中村仲之助一行 (7日、140円) ■灯笼祭興行(5日、211.30円) ▲活動写真会(2日、40円) ■新派新成会(4日、80円) □鹿本郡教育会(4日、20円) △繭置料(9日、45円) 	<ul style="list-style-type: none"> ▲活動写真名金会(3日、54円) ▲活動写真(2日、35円) □加藤氏講演会(1日、5円) ■#佐世保少女節劇久丸一行 (10日、300円) ◆山鹿手踊(1日、27.50円) ■新進劇団(8日、170円) ▲実業会余興活動写真(1日、5円) ■#節劇真田誠(2日、40円) ◆松旭斎天明(3日、60円) ▲真羅上人活動写真(3日、60円) ●浪花節野砲秀雄(5日、90円) ■辰巳会一行(8日、200円) □山鹿水力電気会社総会(1日、10円) □実科女学校(1日、8円) □熊久鉄道速成会(1日、5円) ■#一月興行河内家一行 (11日、1262.75円) ■#河内家+いろは会(10日、400円) ▲郵便局活動写真(1日、15円) 	<ul style="list-style-type: none"> □政友会春期大会(1日、15円) ●浪花節野砲秀雄(5日、115円) ▲蓮如上人活動写真(3日、75円) □蚕糸講習会(2日、20円) ▲日米同盟活動写真(5日、100円) ●伊織直記琵琶追善会(1日、10円) □鹿本鉄道総会(1日、10円) ■新派ひさご会(7日、385円) □鹿本少女会(1日、5円) ■#浪花松子節劇(5日、150円) ▲万年筆広告活動写真(1日、10円) □税務署新築落成祝賀会(1日、8円) ■少女劇美盛会(4日、140円) ▲高村活動写真(2日、30円) ▲皇后陛下御西下活動写真 (3日、60円) ■#温泉祭興行美登里一行 (14日、1958.75円)
--	--	--

表12 大正11年度(1922-23)

収入高7666円7銭

<ul style="list-style-type: none"> ○武徳会席料(1日、5円) ■#節劇御所家一行(4日、80円) ●熊本天狗連浄瑠璃(2日、30円) ▲有明石鹼活動写真(3日、60円) △繭置料(4日、20円) ◆演芸会(2日、30円) ○宇野先生琴大会(1日、15円) ■#花房両面劇(5日、125円) ■#花房両面劇(7日、140円) □鹿本郡青年団(1日、5円) ■中村福時一行(7日、155円) ■運船組二〇加(3日、45円) ●琵琶大会(2日、40円) ■#灯笼祭興行浪花松子一行 (7日、201.58円) △繭置料(7日、35円) ◆手踊揚会(1日、15円) ▲活動写真(3日、60円) ●浪花節吉川一行(3日、60円) 	<ul style="list-style-type: none"> ■中村福三郎一行(15日、425円) □鹿本銀行創立会(1日、10円) ■少女劇美盛会(6日、210円) ■中村福三郎一行(3日、30円) ◆少女手踊会(1日、15円) ◆ジャクラ操一奇術(4日、85円) □山鹿町教育会(1日、5円) ▲日蓮上人御一代記活動写真 (2日、50円) □商工業講演会(1日、5円) ▲活動写真(2日、40円) □公進会秋期大会(1日、10円) ■二〇加宝進会(2日、30円) □山鹿興業無尽商会初会(1日、10円) ▲親鸞上人一代記活動写真 (3日、90円) □山鹿水力電気会社総会(1日、10円) ▲九州毎日新聞活動写真 (1日、13.63円) 	<ul style="list-style-type: none"> ▲活動写真会(2日、30円) ■中村福三郎一行(14日、1442.86円) ■#花房両面劇一行(14日、538円) ◆奇術天華一行(3日、1210円) ◆田村一行講談(2日、40円) ■実川延十郎一行(5日、300円) □鹿本鉄道総会(1日、7円) ▲弘法大師活動写真(3日、90円) ●浪花節京山一行(5日、100円) □巖谷氏講演会(1日、5円) ●野砲秀雄一行(3日、50円) □鹿本郡長送別会(1日、5円) ■中村福三郎一行(8日、240円) ▲東京フィルム会社活動写真 (2日、45円) ■*瀬戸内海連鎖劇(12日、290円) ■温泉祭興行黒田良助一行 (10日、2200円) □山鹿在郷軍人会(1日、3円)
--	---	---

熊本県山鹿市八千代座の演目種別から見えてくるもの

表 13 大正 12 年度 (1923-24)

★収入高ピーク

収入高 8191 円 60 銭

<ul style="list-style-type: none"> ■ # 少女節劇 (5 日、100 円) □ 鹿本銀行総会 (1 日、10 円) ▲ 世界大戦争活動写真 (2 日、40 円) ○ 宇野先生琴大会 (1 日、15 円) ■ 運船組二〇加 (2 日、30 円) ■ # 節劇義勇団 (10 日、250 円) ■ # 節劇義勇団 (7 日、140 円) ■ * 新派連鎖劇忍駒之助 (6 日、145 円) □ 政友会政談演説会 (1 日、15 円) ◆ 松旭齋天左灯籠興行 (7 日、232 円) ● 淨瑠璃 (2 日、30 円) ▲ 菊水活動写真 (4 日、80 円) ◆ 大蛇魔術 (4 日、100 円) ■ 大阪歌舞伎姉川新車 (7 日、245 円) ▲ 東京震災火災活動写真 (1 日、25 円) ■ 中村福三郎 (11 日、275 円) 	<ul style="list-style-type: none"> ▲ 活動写真 (1 日、30 円) ■ 東京震災義捐興行中村福三郎一行 (5 日、20 円) ■ 中村福三郎 (2 日、40 円) ● 浪花節友右衛門一行 (4 日、80 円) ▲ 合田活動写真 (3 日、60 円) ● 伊織直記琵琶大会 (1 日、15 円) ■ 歌喜劇ミライ座一行 (4 日、100 円) ■ 娘盛会一行 (3 日、67.50 円) □ 政談演説会 (1 日、16 円) ② 飛行機 (5 日、20 円) ■ 実川延十郎一行 (5 日、175 円) ■ 中村翫藏一行 (16 日、1695.10 円) ■ 美盛会一行 (10 日、450 円) ■ 中村福三郎一行 (7 日、210 円) ■ 中村福三郎一行 (10 日、250 円) 	<ul style="list-style-type: none"> ▲ 忠臣蔵活動写真 (4 日、100 円) ▲ 大阪毎日新聞社活動写真 (1 日、25 円) ○ 山鹿小学校演奏会 (1 日、5 円) ● 浪花節雲井月子一行 (3 日、60 円) ◆ 学者馬興行 (3 日、90 円) ■ * 佐海軍兵連鎖劇 (6 日、180 円) ■ 黒田良助一行 (10 日、475 円) ▲ 合田活動写真 (4 日、80 円) ● 浪花節港家文蝶一行 (2 日、40 円) ■ 山鹿二〇加 (1 日、16 円) ■ 温泉祭興行中村福三郎 (11 日、2020 円) ■ * 新派連鎖劇大橋幸太郎 (5 日、140 円)
---	--	--

表 14 大正 13 年度 (1924-25)

収入高 6443 円 33 銭

<ul style="list-style-type: none"> ▲ 活動写真 (2 日、40 円) ○ 小歌大会 (1 日、15 円) ◆ 安来節 (5 日、100 円) ● 豊竹団司一行 (4 日、120 円) ■ 操人形 (3 日、40 円) ■ 中村福三郎一行 (7 日、175 円) ■ 文福茶釜一行 (2 日、70 円) ○ 明大演奏会 (1 日、15 円) ■ 灯籠祭興行 (7 日、212 円) ▲ 八千代生命保険活動写真 (1 日、20 円) ◆ 東操一行 (7 日、115 円) ◆ 安来節豊王会 (5 日、125 円) □ 政談演説会 (1 日、10 円) ▲ 活動写真会 (2 日、40 円) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 安来節青葉会 (4 日、100 円) ■ 中村福三郎一行 (10 日、275 円) ■ 中村福三郎一行 (3 日、10 円) ● 雲入道浪花節 (4 日、80 円) ■ 目玉松之助一行 (3 日、150 円) ▲ ラクトーゲン広告活動写真 (1 日、20 円) ▲ 活動写真会 (2 日、40 円) ▲ 活動写真会 (2 日、80 円) ▲ 活動写真会 (2 日、40 円) ■ #* 節劇連鎖中村歌三郎 (6 日、170 円) ◆ 支那奇術一行 (4 日、100 円) ■ 裁判劇一行 (2 日、50 円) ▲ 松竹活動写真 (2 日、40 円) ● 浪花節 (2 日、30 円) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 浪花節 (3 日、75 円) ■ # 尾上美登理一行 (20 日、1685 円) ▲ 活動写真 (2 日、50 円) ■ 新派稔会一行 (13 日、410 円) ■ 曾我廻家時宗一行 (6 日、150 円) □ 鹿本鉄道総会 (1 日、10 円) ◆ 不動千里眼 (1 日、15 円) ▲ 学校衛生活動 (2 日、40 円) ▲ 弘法大師活動写真 (2 日、110 円) ◆ 安来節出雲富士一行 (5 日、125 円) ▲ 大阪毎日新聞活動写真 (1 日、20 円) ■ 嵐市寛一行 (6 日、180 円) ▲ 活動写真 (3 日、60 円) ■ 嵐菊香一行温泉祭興行 (17 日、1231.33 円)
--	--	--

表15 大正14年度(1925-26)

収入高 6205 円 07 銭

<ul style="list-style-type: none"> ■博多二〇加一行(3日、75円) ●天中軒雲月(5日、125円) ●筑前琵琶会(1日、20円) ▲活動写真(1日、20円) ▲活動写真(1日、20円) ▲衛生活動写真(1日、20円) ●筑前琵琶会(1日、20円) ▲教育活動写真(1日、10円) ▲活動写真(2日、40円) ◆山鹿検番手踊(1日、40円) ■嵐三津桐一行(5日、100円) ■灯籠祭三津桐一行(5日、125円) ▲山鹿町活動写真(2日、30円) ●伊織直記筑前琵琶会(1日、15円) ■沢村源之丞一行(4日、160円) ■春野家マチヤン一行(3日、150円) ■国劇座一行(5日、150円) 	<ul style="list-style-type: none"> ●春野百合子一行(2日、60円) ◆ジャクラ操光一行(3日、75円) ②実業会余興興行(2日、5円) ●浄瑠璃団司一行(3日、100円) ②岡田万蔵追善会(2日、30円) ■嵐菊香追善会(1日、30円) ◆講談神田伯龍一行(3日、45円) ●人形素人浄瑠璃会(2日、30円) ■片岡長太郎一行(4日、160円) ▲農薬チランチン活動(1日、20円) ■新派関真佐男一行(3日、135円) ◆安来節太陽会一行(3日、75円) ◆松坂屋演芸会(3日、75円) ●浪花節大会(2日、530円) ▲活動写真(2日、60円) ■#三河屋桃太郎一行(14日、1415円) ▲活動写真(1日、10円) 	<ul style="list-style-type: none"> ■中村福三郎一行(8日、370円) ■中村福三郎一行(4日、140円) ●雲井式部一行(4日、80円) ▲講談活動(2日、100円) ●天中軒女雲月一行(3日、75円) ▲活動写真(2日、50円) ▲活動写真(1日、15円) ▲南米移民講話活動(1日、10円) ■歌劇乙女座一行(4日、110円) ■中村芝太郎一行(10日、285円) ▲軍人会活動(1日、15円) ■#義勇団一行(8日、265円) ▲農薬チランチン活動(1日、20円) ▲喜楽館活動写真(13日、162.50円) ■温泉祭興行成田家一行(14日、906.07円) ▲桂大正活動写真(4日、80円)
--	---	---

表16 大正15年度(1926-27)

収入高 4252 円 32 銭

<ul style="list-style-type: none"> □政談演説会(1日、15円) ▲日進活動写真(2日、40円) ▲歴史活動写真(2日、40円) ■市川幸十郎一行(10日、350円) ■中村芝太郎一行(6日、150円) ●浪花節(2日、80円) ▲活動写真(3日、80円) □鹿本鉄道総会(1日、10円) ■博多二〇加(3日、75円) ▲喜楽館活動(3日、69円) ●若菊浪花節(3日、75円) ◆券番温習会(5日、200円) ▲喜楽活動(3日、69円) ②山鹿実業会余興(3日、10円) 	<ul style="list-style-type: none"> ●浪花節富士月子(3日、90円) ■陪審裁判劇(1日、25円) ●豊竹団司一行(4日、60円) ▲喜楽館活動(3日、70円) ▲亜細亜ノ光ノ活動(2日、100円) ●現代奈良丸(1日、25円) ▲日光活動写真(3日、60円) □世界探険講演(1日、15円) ■保少年劇(3日、80円) □防火宣伝口演包銭(1日、5円) ●関東小鳥一行(8日、320円) ■*徳川連鎖劇(4日、120円) ■梅沢昇一行(5日、150円) ▲活動写真(2日、55円) 	<ul style="list-style-type: none"> ▲御大葬活動写真(3日、75円) ●浪花節佐賀丸一行(4日、90円) ◆杵屋手踊揚会(2日、40円) ■博多二〇加(5日、115円) ▲清正公活動(2日、110円) ■尾上鶴五郎一行(5日、150円) ▲丹後地震活動(1日、25円) ◆女猫八一行(3日、75円) □鹿本鉄道総会(1日、10円) ●浪花節華千代一行(3日、75円) ▲仲田活動写真(1日、20円) ■#広沢一行(13日、1022.95円)
---	--	---

熊本県山鹿市八千代座の演目種別から見えてくるもの

表 17 昭和 2 年度 (1927-26)

収入高 3302 円 45 銭

<ul style="list-style-type: none"> ●浪花節女雲月 (2 日、40 円) ②浅尾信次一行 (6 日、150 円) □蘭仲買総会 (1 日、10 円) ▲活動写真会 (1 日、25 円) ▲活動写真一行 (2 日、40 円) □民政党政談演説会 (1 日、15 円) ■# 尾上八百蔵一行 (13 日、360 円) ●現代雲月一行 (2 日、40 円) □政友会演説会 (1 日、15 円) ▲西郷活動写真 (1 日、10 円) ■博多二〇加一行 (3 日、90 円) ●天中軒雲月一行 (2 日、60 円) ■中村福三郎一行 (8 日、200 円) 	<ul style="list-style-type: none"> ■東猛夫新派一行 (12 日、270 円) ■東猛夫一行 (5 日、70 円) ◆秋本五郎万歳一行 (5 日、100 円) ■大谷友三郎一行 (2 日、90 円) ●天光軒満月一行 (4 日、80 円) ■五月信子一行 (2 日、90 円) ■乃木劇一行 (1 日、17 円) ■嵐菊香一行 (4 日、40 円) ▲日本教育活動写真 (1 日、15 円) ■東京歌舞妓一行 (5 日、175 円) ■中村吉十郎一行 (3 日、120 円) ●琵琶会熊本連中 (2 日、25 円) ▲大阪毎日新聞活動写真 (1 日、20 円) 	<ul style="list-style-type: none"> ■東猛夫一行 (4 日、110 円) □鹿本鉄道会社総会 (1 日、10 円) △京都大丸呉服特売 (4 日、160 円) ●京山左近浪花節一行 (2 日、40 円) ◆安来節山下吉之助一行 (3 日、70 円) ■* 入船連鎖劇一行 (2 日、40 円) ■梅沢昇時代劇一行 (5 日、150 円) ▲電気宣伝活動写真 (1 日、20 円) ▲フランド宣伝活動写真 (1 日、20 円) □政談演説会 (1 日、15 円) □煙草小売人総会 (1 日、15 円) ■# 広沢一行 (12 日、473.59 円)
--	--	---

表 18 昭和 3 年度 (1928-29)

収入高 3302 円 45 銭

<ul style="list-style-type: none"> ▲谷村計介活動写真 (2 日、45 円) ■忠臣蔵凶案劇 (2 日、70 円) ▲済南事件原燈写真 (1 日、20 円) ●浪花節巴うの子一行 (3 日、75 円) ▲大阪毎日新聞活動写真 (1 日、20 円) ■博多二〇加一行 (3 日、60 円) ■宗教劇一行 (2 日、70 円) ■中村福三郎一行 (7 日、190 円) ▲ラヂオ宣伝活動写真 (1 日、20 円) ■仏教劇一行 (2 日、25 円) ■女沢正一行 (3 日、70 円) ■千代田一行 (3 日、95 円) ▲朝日足袋宣伝活動 (1 日、20 円) ▲電気館活動写真 (3 日、40 円) ▲大阪朝日新聞活動写真 (1 日、20 円) 	<ul style="list-style-type: none"> ▲衛生活動写真 (1 日、10 円) ▲不動銀行宣伝活動写真 (1 日、20 円) ▲大阪毎日新聞活動写真 (1 日、20 円) ▲熊本電気館活動 (1 日、25 円) ■中村福三郎一行 (6 日、170 円) ■喜劇明星派一行 (4 日、40 円) ▲若林大尉活動写真 (2 日、40 円) ■中村福三郎一行 (3 日、60 円) ▲御大典奉祝活動 (2 日、20 円) ▲大阪毎日新聞活動写真 (1 日、20 円) ■歌劇団一行 (2 日、50 円) ■近江二郎一行 (2 日、70 円) ■犯罪防止劇 (2 日、45 円) ●浪花節一行 (2 日、33.20 円) ■新派岩城一行 (2 日、43 円) 	<ul style="list-style-type: none"> ▲ムッソリニ活動写真 (1 日、25 円) ■# 節劇一座阪東多門 (18 日、735.04 円) ■* 西川秀ノ助連鎖劇一行 (5 日、100 円) ■黒田良介一行 (5 日、150 円) ■木村駒子一行 (2 日、60 円) □鹿本鉄道総会 (1 日、10 円) ▲大阪朝日新聞活動写真 (1 日、20 円) ▲電気宣伝活動写真 (1 日、20 円) ○山鹿小学校学芸会 (1 日、6 円) ■博多二〇加一行 (4 日、90 円) ▲旭座出張活動写真 (2 日、35 円) ■嵐染五郎一行 (3 日、100 円) ■温泉祭興行 (13 日、369.01 円)
--	--	---

表 19 昭和 4 年度 (1929-30)

収入高 3618 円 71 銭

<ul style="list-style-type: none"> ■嵐徳十郎一行 (3 日、75 円) ▲北極探検活動写真 (1 日、5.60 円) ◆女猫八一行 (2 日、27 円) ●浪花節如雲一行 (3 日、45 円) ▲物云フ活動写真 (2 日、35 円) ▲灯籠祭活動 (2 日、45 円) ■博多二〇加一行 (3 日、60 円) ■模擬裁判劇 (5 日、125 円) ◆山鹿置屋手踊り (3 日、60 円) ▲法然上人活動写真 (2 日、80 円) ◆柔道拳闘会 (2 日、50 円) ●浪花節現代雲月 (2 日、40 円) ■模擬裁判劇 (3 日、20 円) ■模擬裁判劇 (1 日、25 円) 	<ul style="list-style-type: none"> ■喜劇蝶々会 (5 日、90 円) ●浪花節栄楽一行 (4 日、67.10 円) ▲幼稚園主催活動写真 (2 日、50 円) ●浄瑠璃揚会 (1 日、20 円) □政友会政談演説 (1 日、25 円) ■徳川琴子一行 (2 日、10.12 円) ②日本名物男 (1 日、15 円) ■歌舞大一座 (10 日、575 円) ■# 阪東多門一行 (15 日、424.18 円) □鹿本郡農会 (1 日、10 円) ●浪花節都家三勝一行 (2 日、50 円) ■岡田嘉子一行 (2 日、80 円) ■黒田良介一行 (9 日、220 円) □鹿本鉄道総会 (1 日、10 円) 	<ul style="list-style-type: none"> ②敬老会余興 (1 日、10 円) ▲不動銀行活動写真 (1 日、20 円) ◆柔道拳闘大会 (2 日、50 円) ■中村芝太郎一行 (6 日、135 円) ◆忍仙術一行 (1 日、20 円) ○山鹿小学校学芸会 (1 日、6 円) ▲大阪毎日新聞活動写真 (1 日、20 円) ●浄瑠璃揚会 (2 日、40 円) ■広沢多見蔵一行 (6 日、140 円) ●籠甲斎虎丸一行 (2 日、60 円) ●一心亭辰子一行 (5 日、70 円) ■温泉祭興行 (15 日、700.49 円)
--	---	--

表20 昭和5年度(1930-31)

収入高 3504 円 05 銭

<ul style="list-style-type: none"> ◆橋家太郎一行(3日、50円) ▲前田先生謝恩会活動写真(2日、55円) □民政党演説会(1日、25円) □政友会演説会(1日、25円) ■#雲童節劇一行(3日、65円) ▲不滅親鸞活動写真一行(2日、60円) ●浪花節中川伊勢太夫一行(3日、46.19円) ◆出雲小糸一行(2日、35.30円) ■博多二〇加一行(4日、65円) ●浪花節雲月一行(2日、54円) ◆舞踊ノター一行(1日、20円) □筑波宇之助演説会(1日、15円) ■裁判劇川村一行(5日、140円) ▲無憂華活動写真一行(2日、70円) 	<ul style="list-style-type: none"> ■黒田良助一行(7日、70円) ■裁判劇川村一行(4日、80円) ●鼈甲斎虎王丸一行(2日、45円) ●中村芝太郎一行(5日、95円) ▲活動写真一行(1日、20円) □政友会政談演説(1日、25円) ■ヨシエ劇一行(4日、16円) ○山鹿小学校奏演会(1日、6円) ■#阪東多門一行(14日、820.63円) ■喜劇童十郎一行(6日、65円) ②古賀栄子一行(4日、100円) ▲活動写真ノアの箱船一行(2日、50円) ■岡田嘉子一行(1日、40円) ▲三福キネマー一行(6日、120円) ■日本少女歌劇一行(2日、50円) 	<ul style="list-style-type: none"> ▲活動写真アジアノ嵐一行(2日、27円) ▲三福キネマー一行(6日、120円) ■黒田良助一行(5日、80円) ○山鹿小学校雑祭(1日、6円) ▲高瀬錦館活動写真一行(2日、30円) ●浪花節中川伊勢太夫一行(1日、20円) ▲活動写真一行(5日、115円) ■合同歌舞伎大一座(7日、180円) ○鹿本鉄道会社定期総会(1日、10円) ▲活動写真錦館一行(2日、30円) ●浪花節合同一行(1日、40円) ■#温泉祭興行阪東多門(17日、422.93円)
---	---	---

表21 昭和6年度(1931-32)

収入高 3895 円 80 銭

<ul style="list-style-type: none"> ◆天勝一行(2日、80円) ■喜劇明星派一行(7日、90円) ▲活動写真一行(2日、30円) ■喜劇明星一行(6日、145円) ●雲井式部一行(2日、50円) ▲活動写真(1日、25円) □愛国婦人会(1日、10円) ■#春駒節劇一行(7日、130円) □在郷軍人会(1日、10円) ■右団次一行(2日、80円) ◆相撲柔道試合(2日、35円) ■#節劇春駒一行(5日、64.50円) ■喜劇明星派一行(7日、126.50円) ■喜劇明星派一行(3日、10円) 	<ul style="list-style-type: none"> ○軍事講演軍楽隊(1日、10円) □鹿本鉄道総会(1日、10円) ●浪花節篠田実一行(2日、30円) ▲朝日新聞活動写真一行(1日、20円) ▲満州軍慰問金活動写真(2日、40円) □満州事変講演会(1日、10円) ■#阪東多門一行(20日、1196.50円) ◆万歳弁慶一行(4日、100円) ●浪花節村田道子一行(3日、40円) ■大蛇劇一行(3日、75円) ▲教育活動写真(1日、15円) ■軍事劇一行(5日、72.87円) □政友会政談演説会(1日、25円) □民政党政談演説会(1日、25円) 	<ul style="list-style-type: none"> ■両面劇一行(4日、50円) ○敬老会処女会余興(1日、26.20円) □鹿本鉄道総会(1日、10円) ○山鹿小学校雑祭余興(1日、8.80円) □郡教育会(1日、10円) ■中村鯉鯉一行(2日、30円) ▲三勇士活動写真(1日、20円) ●浪花節酒井雲一行(2日、70円) ■五月信子一行(2日、70円) ■#節劇吉高家一行(10日、320円) ▲社会宣伝活動写真(1日、15円) ■#阪東多門一行(16日、710.43円)
---	--	--

表22 昭和7年度(1932-33)

収入高 3477 円 34 銭

<ul style="list-style-type: none"> ▲活動写真(1日、15円) ◆拳闘会(2日、40円) ▲活動写真(1日、20円) ▲活動写真(2日、40円) ●三勇士浪花節(1日、20円) ▲活動写真(2日、40円) ▲活動写真(2日、40円) ▲活動写真(1日、2円) ◆万歳玉の浦(2日、30円) ■#岩田節劇一行(1日、20円) ■新国劇一行(4日、60円) □満州事変講演会(1日、7.60円) □鹿本鉄道臨時総会(1日、10円) ▲活動写真(1日、25円) ■曾我廼家喜劇(4日、58.48円) ▲大毎活動写真(1日、20円) ■永井両面劇一行(8日、140円) ▲大朝活動写真(1日、25円) 	<ul style="list-style-type: none"> ●浪花節鶴若一行(3日、60円) ▲大朝活動写真(1日、20円) ●篠田実一行(2日、40円) ▲活動写真(1日、25円) □政談演説会(1日、25円) △蚕糸品評会(1日、10円) ■博多淡海一行(3日、90円) ■#新声劇節劇一行(3日、20円) □政談演説会(1日、25円) ■#新声節劇一行(9日、200円) ■消防劇一行(3日、60円) ◆レビュー一行(1日、20円) ■東京歌舞伎女優一行(5日、125円) ■女優歌舞伎一行(1日、20円) ○ラジオ山鹿の夕べ(1日、20円) ●浪花節京山若丸一行(2日、35円) ▲活動写真(1日、20円) ■裁判劇一行(3日、35円) 	<ul style="list-style-type: none"> ■#阪東多門一行(20日、800円) □郡農会(1日、20円) ▲活動写真(1日、30円) ■信用組合宣伝劇(1日、15円) ▲空中戦活動(1日、30円) □鹿本鉄道総会(1日、10円) ●浪花節六神丸宣伝(5日、86円) ○山鹿小学校雑祭(1日、9.46円) ●浪花節酒井雲一行(2日、50円) □講演会(1日、20円) ▲時局講演活動写真(2日、10円) ▲活動写真(1日、30円) ◆奇術天勝一行(2日、65円) ■人心劇一行(1日、26.19円) ■#山村桃太郎温泉祭(20日、794.61円)
---	---	---

熊本県山鹿市八千代座の演目種別から見えてくるもの

表 23 昭和 8 年度 (1933-34)

収入高 4348 円 80 銭

<ul style="list-style-type: none"> ▲大毎活動トーキ (1 日、30 円) □郡煙草小売人総会 (1 日、10 円) ◆講演奇術 (1 日、20 円) ▲活動写真 (1 日、20 円) ●酒井雲一行 (1 日、35 円) ◆大津お万歳一行 (4 日、30.70 円) ■# 春野家節劇一行 (4 日、45.50 円) ■市川鯉三郎歌舞伎一行 (5 日、75.20 円) ◆拳闘会一行 (1 日、15 円) ◆大津お万一行 (4 日、80 円) ▲九州日報社活動写真 (1 日、25 円) ○純日本演奏会竹鹿会 (1 日、15 円) ▲非常時日本活動写真 (2 日、60 円) ◆奇術小天勝一行 (2 日、40 円) ■少女劇一行 (7 日、122.10 円) □伊東天山五一五講演 (1 日、20 円) 	<ul style="list-style-type: none"> ▲大朝新聞活動 (1 日、10 円) ■# 松島家一行 (17 日、340 円) ■# 松島家一行 (3 日、20 円) ○幼稚園演奏会 (1 日、20 円) ●浪花節京山幸枝一行 (3 日、55 円) ■御初地蔵劇一行 (3 日、43.27 円) ●壳葉宣伝浪花節野砲一行 (2 日、40 円) ○鹿本楽友会演奏会 (1 日、20 円) ●浪花節頭山天照一行 (3 日、50 円) □軍事講演会 (2 日、40 円) ■少女劇松竹会一行 (1 日、10 円) ■# 節劇桃太郎一行 (22 日、807.77 円) ◆万歳美勝会一行 (2 日、50 円) ▲日本魂活動写真 (1 日、25 円) ■喜劇愉快劇一行 (3 日、70 円) ●天中軒大雲一行 (1 日、25 円) 	<ul style="list-style-type: none"> ■新派劇小松正夫一行 (7 日、145.87 円) ②敬老会余興 (1 日、31.20 円) ■鹿本鉄道余興運船組一行 (1 日、30 円) ■# 節劇松島家一行 (12 日、220 円) ●宣伝浪花節奈良奴一行 (3 日、55 円) ◆万歳吾妻家一行 (2 日、40 円) ●宣伝浪花節大和小式部一行 (3 日、55 円) ◆奇術天勝一行 (2 日、50 円) ●鼈甲斎虎丸一行 (1 日、30 円) ▲電気社講演会活動 (1 日、20 円) ●寿々木米若一行 (2 日、20 円) □政談演説会 (1 日、25 円) ■# 節劇多門一行温泉祭 (18 日、1336.57 円)
--	--	--

表 24 昭和 9 年度 (1934-35)

収入高 3758 円 20 銭

<ul style="list-style-type: none"> □鹿本郡煙草小売人総会 (1 日、10 円) ●宣伝浪花節野砲一行 (2 日、25 円) ■新派劇八雲一行 (3 日、55 円) ▲清正公活動写真 (1 日、25 円) □中岡氏講演会 (1 日、20 円) ●浪花節京山小円一行 (1 日、25 円) ◆都家蝶々会万歳一行 (3 日、60 円) ■新派劇八雲一行 (9 日、157.75 円) ○青年団揚会 (1 日、20 円) ■大毎劇一行 (4 日、80 円) ■新派黒田一行 (5 日、80 円) □鹿本鉄道総会 (1 日、10 円) ○竹鹿会 (1 日、20 円) ●宣伝浪花節吉田奈良奴一行 (3 日、60 円) ▲大朝新聞活動 (1 日、20 円) 	<ul style="list-style-type: none"> ●関東浪曲大会一行 (1 日、25 円) ◆宝会万歳一行 (1 日、30 円) ●浪花節一行 (1 日、20 円) ●梅中軒鶯童一行 (1 日、35 円) ◆万歳小原万龍一行 (3 日、60 円) ■# 三河屋桃太郎一行 (3 日、20 円) ■# 三河屋桃太郎一行 (6 日、120 円) ●寿々木米成一行 (1 日、10 円) ▲社会課活動写真 (2 日、35 円) ▲ウシヲ実映会 (1 日、19 円) ◆万歳捨丸一行 (1 日、25 円) ▲大毎新聞活動 (1 日、20 円) ■国防劇一行 (1 日、11.50 円) ◆天勝奇術一行 (1 日、30 円) ●浪花節極楽一行 (1 日、6.50 円) ■# 阪東多門一行 (20 日、1334.67 円) 	<ul style="list-style-type: none"> ●浪花節松月一行 (4 日、70 円) ●浪花節雲井式部一行 (1 日、11.35 円) ◆宗丸会万歳一行 (3 日、60 円) ●浪花節雲月嬢一行 (2 日、25 円) □鹿本鉄道総会 (1 日、10 円) ○山鹿青年演芸会連中 (1 日、20 円) ◆九日新聞舞踏会 (1 日、20 円) ◆奇術師天斎一行 (1 日、11 円) ■# 節劇佐賀美家一行 (13 日、143.04 円) ▲活動写真一行 (2 日、30 円) ▲大毎新聞活動写真 (1 日、20 円) ■# 山村桃太郎一行 (3 日、60 円) ■# 山村桃太郎一行 (2 日、40 円) ●浪花節京山小円一行 (2 日、40 円) ■# 阪東多門一行 (18 日、753.39 円)
---	--	--

(八千代座「収支計算書」収入之部より塚原作成)

略号：

- ：演劇興行 (歌舞伎、人形芝居、壮士芝居・新派劇、少女劇、二〇加、歌劇、節劇■#、琵琶劇■+、両面劇、連鎖劇■*)
- ：音曲興行 (浄瑠璃、浪花節、琵琶)
- ◆：その他興行 (踊、講談、曲芸・奇術、武術など)
- ▲：活動写真の興行
- ：集会 (演説会、講演会、総会、講習会など)
- ：発表会 (文芸会、学芸会、演奏会、挿花会など)
- △：その他用途 (蒔置・商品の陳列・販売など、興行・集会・発表会以外のもの)
- ②：内容不明のもの

- ・昭和 10 年度 (1935-36) は「収支計算書」(第 25 回) なし
- ・昭和 11 年度 (1936-37) ~昭和 13 年度 (1938-39) の「収支計算書」(第 26 回~第 28 回) には興行内訳なし

表25 八千代座の総収入高・年間使用日数と各演目種別の日数およびその比率

明治44～昭和9年度(1911～1935)

年度	総収入高・ 使用日数、 演目種別	総 収入 高 (円)	使用 日 数 計	■ 演 劇 興 行	● 音 曲 興 行	◆ そ の 他 興 行	▲ 活 動 写 真	□ 集 会	○ 発 表 会	△ そ の 他 用 途	◎ 内 容 不 明
明治44 (1911-12)		3818.96	143+	69+ (48)	27 (19)	3 (2)	0 (0)	11 (8)	6 (4)	20 (14)	7 (5)
明治45 (1912-13)		3679.24	149	81 (54)	18 (12)	0 (0)	12 (8)	3 (2)	3 (2)	27 (18)	5 (3)
大正2 (1913-14)		3570.205	144	77 (53)	36 (25)	5 (3)	15 (10)	10 (7)	1 (1)	0 (0)	0 (0)
大正3 (1914-15)		2862.61	132	70 (53)	14 (11)	19 (14)	18 (14)	11 (8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
大正4 (1915-16)		2707.66	132	84 (64)	5 (4)	12 (9)	8 (6)	16 (12)	2 (2)	5 (4)	0 (0)
大正5 (1916-17)		3646.04	153	110 (72)	1 (1)	8 (5)	3 (2)	9 (6)	8 (5)	10 (7)	1 (1)
大正6 (1917-18)		4082	181	103 (57)	10 (6)	6 (3)	29 (16)	11 (6)	2 (1)	15 (8)	5 (3)
大正7 (1918-19)		6042.57	184	124 (67)	12 (7)	3 (2)	31 (17)	11 (6)	0 (0)	0 (0)	3 (2)
大正8 (1919-20)		7292.44	196	142 (72)	4 (2)	0 (0)	26 (13)	6 (3)	2 (1)	16 (8)	0 (0)
大正9 (1920-21)		5675.44	172	103 (60)	13 (8)	8 (5)	21 (12)	9 (5)	1 (1)	17 (10)	0 (0)
大正10 (1921-22)		7363.70	204	116 (57)	14 (7)	4 (2)	29 (14)	20 (10)	1 (1)	20 (10)	0 (0)
大正11 (1922-23)		7668.07	195	122 (63)	15 (8)	13 (7)	21 (11)	11 (6)	2 (1)	11 (6)	0 (0)
大正12 (1923-24)		8191.60	199	143 (72)	12 (6)	14 (7)	20 (10)	3 (2)	2 (1)	0 (0)	5 (3)
大正13 (1924-25)		6443.13	177	105 (59)	13 (7)	31 (18)	24 (14)	2 (1)	2 (1)	0 (0)	0 (0)
大正14 (1925-26)		6205.07	173	95 (55)	24 (14)	13 (8)	37 (21)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	4 (2)
大正15 (1926-27)		4252.32	131	55 (42)	28 (21)	10 (8)	30 (23)	5 (4)	0 (0)	0 (0)	3 (2)
昭和2 (1927-28)		3302.45	127	81 (64)	14 (11)	8 (6)	8 (6)	6 (5)	0 (0)	4 (3)	6 (5)
昭和3 (1928-29)		3326.25	124	93 (75)	5 (4)	0 (0)	24 (19)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	0 (0)
昭和4 (1929-30)		3618.71	133	85 (64)	21 (16)	10 (8)	11 (8)	3 (2)	1 (1)	0 (0)	2 (2)
昭和5 (1930-31)		3504.05	142	84 (59)	9 (6)	6 (4)	32 (23)	5 (4)	2 (1)	0 (0)	4 (3)
昭和6 (1931-32)		3895.80	136	99 (73)	9 (7)	8 (6)	9 (7)	8 (6)	3 (2)	0 (0)	0 (0)
昭和7 (1932-33)		3477.34	138	86 (62)	15 (11)	7 (5)	20 (14)	8 (6)	1 (1)	1 (1)	0 (0)
昭和8 (1933-34)		4348.80	157	103 (66)	19 (12)	18 (11)	8 (5)	5 (3)	3 (2)	0 (0)	1 (1)
昭和9 (1934-35)		3758.20	137	87 (64)	20 (15)	14 (10)	9 (7)	4 (3)	3 (2)	0 (0)	0 (0)

(表1～24より塚原作成、()内は%)

**Observations Following a Classification of Programs
at Yachiyoza Performing Arts Theatre in Kumamoto Prefecture, Yamaga City:
Musical Genres that Resonated in the Local Theaters of the Meiji, Taishō,
and Pre-war Shōwa Eras**

TSUKAHARA Yasuko

Yachiyoza Performing Arts Theatre, a nationally designated Important Cultural Property in Kumamoto Prefecture, Yamaga City, is a Kabuki-style theatre constructed in 1910 that was equipped with a *hanamichi* (a raised platform that connects the back of the theatre to the main stage), a rotating stage, *masuseki* (tatami-style box seats), and gallery seats. From its opening in 1911, it was a multipurpose space that in addition to being used for theatrical and musical performances, was also used for every type of assembly and address. Yachiyoza is not only a performance theatre but also an extremely valuable source of preserved documentary materials related to scenery, props, and theatre operation.

In this article, the music that resonated in the Yachiyoza Performing Arts Theatre from between the 1910s and 1930s is investigated through one of the above-mentioned documentary materials, the *Yachiyoza shūshi keisan sho* (Yachiyoza Statement of Income and Expenditures). Using this document, the programs are classified into the categories of theatrical performances, musical performances, assemblies, presentation conferences, other, and unknown. As a result, it has been discovered that the music that most resounded in the halls of Yachiyoza was a mixture of genres and a blending of Japanese and Western styles. This differentiated it from the music of the Teikokugekijō (Imperial Theatre) which opened in Tōkyō in the same year as Yachiyoza, 1911, and of the Sōgakudō, the first music hall in Japan which was established at the Tōkyō Music School in 1890. The materials of Yachiyoza, being as they are a means to observe at a fixed point the whole of music in a particular region, are extremely important objects of historical music research.